新聞４コマ漫画が描く菅直人首相（後編 －１）

―首相在任期間中の３大紙の４コマ漫画に関する一分析　2010～2011―

Prime Minister Naoto Kan in Newspaper Comic Strips (Part 3): An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2010–2011

水野　剛也
Takeya　MIZUNO

はじめに　前編・中編の要約と後編 －１のねらい

本論文は、菅直人首相の在任期間中（2010年６月８日～2011年９月２日）に３大全国紙（『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』）の社会面に掲載されたすべての４コマ漫画（朝刊・夕刊とも）を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが首相をどのように描いているかを主に質的に分析する試みである。

本誌前々号（第52巻・第２号、2015年３月）に掲載した前編では、論文の目的・方法・意義・構成を説明した上で、量的な側面から全体像を俯瞰した。

それをふまえ、本誌前号（第53巻・第１号、2015年11月）に掲載した中編では、『毎日新聞』の「アサッテ君」（朝刊）と「ウチの場合は」（夕刊）、そして『読売新聞』の「コボちゃん」（朝刊）を質的に分析した。

本号に掲載する後編 －１では、『朝日新聞』の「ののちゃん」（朝刊）を同じ方法で分析する。

本誌次号以降に掲載する予定の後編 －２では、『朝日新聞』の「地球防衛家のヒトビト」（夕刊）を同一の手法で分析し、それにつづく結論ではそれまでの分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察を提示するつもりである。

１　本論文の目的・方法・意義、および構成

本誌前々号（前編）に掲載。

２　量的な側面から見た全体的な傾向

本誌前々号（前編）に掲載。

3　新聞４コマ漫画が描く菅首相

・アサッテ君（東海林さだお）『毎日新聞』（朝刊）

・ウチの場合は（森下裕美）『毎日新聞』（夕刊）　　本誌前号（中編）に掲載。

・コボちゃん（植田まさし）『読売新聞』（朝刊）

・ののちゃん（いしいひさいち）『朝日新聞』（朝刊）

『朝日新聞』の朝刊で連載されている「ののちゃん」（いしいひさいち）は、主人公・山田のの子の家族を中心として、家庭や学校における彼らの日常生活を描く家庭的な４コマ漫画である。山田家は５人家族で、会社員の父親・たかし、専業主婦の母親・まつ子、中学生の長男・のぼる、小学３年生の長女・のの子、祖母・山野しげ、からなる。無愛想で散歩嫌いの飼い犬・ポチもいる。2009年の作者のインタビューによると、漫画の舞台は自身の出身地である岡山県玉野市をモデルにした「たまのの市」であるという。[34]

「ののちゃん」は、その前身「となりのやまだ君」を改題した漫画で、本論文執筆時点（2015年11月）でも6,500回を超えてなお継続中である。「となりのやまだ君」は1991年10月から1,935回の連載をかさね、1997年４月に「ののちゃん」に改題された。「となりのやまだ君」を含めれば、連載は24年、8,400回を超える。その間、新聞以外の媒体にも進出し、1999年７月には「ホーホケキョ　となりの山田くん」として映画でアニメ化、2001年７月から2002年９月にかけてはテレビでも「ののちゃん」のタイトルでアニメ化されている。[35]

作者・いしいひさいち（本名・石井壽一）は、４コマ漫画を中心に多方面で活躍している漫画家で、「現代の４コマ漫画発展に大きな功績を残した一人」と評価する研究者もいるほどの第一人者である。1951年うまれのいしいは、関西大学で漫画同好会に所属し、デビュー作は在学中の1972年から求人情報誌『日刊アルバイトパートタイマー情報』に連載した「Ｏｈ！バイトくん」であった。1976年に大学を卒業後は次々にヒットを飛ばし、代表作として「がんばれ！！タブチくん！！」（『漫画アクション』）、「経済外論」（『朝日新聞』）、「コミカル・ミステリー・ツアー」（『ミステリーズ！』）、などがある。受賞歴も多く、第31回文藝春秋漫画賞（1985年）、第32回日本漫画家協会賞大賞（2003年）、第54回菊池寛賞（2006年）、などがある。2003年には「ののちゃん」などで第７回手塚治虫文化賞短編賞を受賞している。[36]

菅政権時の「ののちゃん」には、首相を描いた作品は１本もなかった（441本中０本）。本論文が分析対象とした他の新聞４コマ漫画では、『毎日新聞』夕刊の「ウチの場合は」（339本中０本）と『読売新聞』朝刊の「コボちゃん」（441本中０本）も首相を描いていない。

もっとも、先行研究（本論文前編・後注３参照）が指摘しているように、「ののちゃん」は「きわめて家庭色が強い漫画で、政治や政治家がほとんど登場しない」という特徴をもっているため、菅を描いた作品が存在しなかったことは驚くにはあたらない。過去の首相を見ると、５年５ヵ月の在任期間中、小泉純一郎を描いた作品は1,927本中わずか４本（0.20％）しかなかった。しかも、その４本

のうち２本は「番外作品」（番号が付されていない作品）であった。さらに、安倍晋三（第１次、以下略）・福田康夫・麻生太郎を描いた作品は皆無（安倍＝354本中０本、福田＝355本中０本、麻生＝348本中０本）で、小泉以降の首相でもっとも「描かれやすい」鳩山由紀夫でさえも163本中１本（0.61％）にとどまっている。つまり、小泉から菅までの約10年４ヵ月間を通じて、本論文の定義に合致する方法で首相を描いた作品は５本（小泉＝４本、鳩山＝１本）しかないわけである。「首相が登場することはめったにない」と先行研究が特徴づけているように、菅を描いた作品が１本もなかったことは、これまでの傾向に照らせば何ら不自然ではない。なお、小泉政権時にあった「番外作品」は、菅を含め安倍以降の首相の在任期間中には１本も掲載されていない。[37]

首相が１度も登場しないばかりか、菅政権時の「ののちゃん」には首相の存在をほのめかす作品さえ皆無であり、「純家庭的」な「ウチの場合は」や「コボちゃん」よりもなお政治家や政治問題と無縁であった。本論文の中編で論じたように、「ウチの場合は」には「歴代首相」という言葉が使われている作品（**図11**）と菅の後任の野田佳彦が描かれている作品（**図12**）があった。同じく、「コボちゃん」にも登場人物が「新しい首相」（野田）について語る作品（**図14**）があった。つまり、先行研究が「純家庭的」と特徴づけている「ウチの場合は」と「コボちゃん」でさえ何らかの形で「首相」に言及しているにもかかわらず、「ののちゃん」には「首相」の影さえ見えないのである。

本論文が上述の点に着目するのは、作者のいしいが本来、政治を含む時事的な問題にまったく無関心な漫画家ではないからである。漫画研究者の山口佐栄子も指摘しているように、いしいが描いてきた４コマ漫画のテーマは「政治経済、時事問題から哲学まで、多岐にわたる」。先行研究も、数こそ少ないが小泉を描いた作品は「痛烈な政治風刺を効かせ、意図して批判的な文脈で首相を描いて」おり、かつ鳩山を描いた１本も「かなり辛辣な政治風刺を展開している」と分析し、そのために「ののちゃん」を「純家庭的４コマ漫画」ではなく、ごくまれに鋭い政治批評・風刺をすることもある「家庭的４コマ漫画」として特徴づけている。小泉政権以降、全国３大紙の４コマ漫画のなかで唯一「番外作品」を掲載している事実も、政治問題や現実社会で起きている出来事に作者が一定の注意を払っている証左と見ることができる。しかし、その特徴は菅の在任期間中にはまったく表出しなかった。むしろ、「純家庭的４コマ漫画」である「ウチの場合は」と「コボちゃん」よりもさらに「純家庭的」であったとさえいえる。[38]

もっとも、先行研究が指摘しているように、「ののちゃん」は「意図的に政治問題を避け、あえて家庭的な漫画に徹している」と考えられるため、本論文の知見だけをもって他の「純家庭的４コマ漫画」と同列に位置づけるのは早計である。作者のいしいは連載3,000回を迎えた際（2005年９月）に、「世の中がどうなろうと『しらんぷり』が『ののちゃん』の基本です」と語っている。また、2012年の著作に寄稿したインタビュー形式の自筆エッセーでも、「私にはニュース漫画家の側面があるのですが［『ののちゃん』では］これもヤセガマンしてやっていません」と書いている。それらの言葉を借りれば、これまでと同じく、菅の在任期間中にも「しらんぷり」「ヤセガマン」している作者をふりむかせるほどの出来事は起きなかったといえる。[39]

意図的な非政治性についてさらに付言すれば、３大紙の４コマ漫画のなかで「ののちゃん」だけが2011年３月11日に発生した東日本大震災、および東京電力福島第一原発事故を明確な形で作品に取りあげていない。本論文の中編で指摘したように、時事的４コマ漫画である「アサッテ君」（『毎日新聞』朝刊）はもちろん、家庭色がきわめて強い「ウチの場合は」と「コボちゃん」、そして後編 －2で分析する予定の「地球防衛家のヒトビト」（『朝日新聞』夕刊）も、震災とその余波を少なくない作品で題材としている。「ののちゃん」の舞台が被災地から比較的に遠いと考えられる「たまのの市」（岡山県玉野市がモデル）である事情を考慮しても、日本全体を揺るがした史上最大規模の災害にさえ、少なくとも表面上はほとんど影響を受けていないことは注目に値する。

首相ばかりか大震災・原発事故さえ題材とされていない点をかんがみれば、やはり、「ののちゃん」では現実社会における出来事（とくに政治的な問題）は意識的に排除されていると見るべきである。作者のいしいは2012年５月29日号の『朝日新聞』に掲載された寄稿でも、「『ののちゃん』では、あいかわらず適当な設定です」と書いている。この言葉からもわかるように、何が起きようとも「適当」に「しらんぷり」、あるいは「ヤセガマン」しつづけることこそが、むしろ他の新聞４コマ漫画と一線を画す「ののちゃん」の独自性だといえる。[40]

上述の点に関連して、先行研究は一貫して「ののちゃん」を「純家庭的４コマ漫画」ではなく、ごくまれに鋭い政治批評・風刺をすることもある「家庭的４コマ漫画」と特徴づけてきたが、本論文でこの分類を変更する必要性は見いだせない。前身の「となりのやまだ君」から連載20年を迎えた際、作者は「新聞まんがだからこの程度がよいとか、いつも同じがよいとは考えません」と書いている。先行研究も指摘しているように、今後、「突然に政治風刺性を発揮して首相を描く可能性を『ののちゃん』はつねに内包している」と考えるべきである。[41]

とはいえ、「ののちゃん」の首相描写には未知の部分があまりにも多く残されており、さらなる研究の積みあげが不可欠であることはいうまでもない。数少ないとはいえ、小泉を描いた作品が４本、自民党から政権を奪った民主党の鳩山を描いた作品も１本ある。菅の後任の野田佳彦、民主党から政権を奪い返した安倍晋三（第２次）、さらにそれ以降、いしいの意図的な無関心を途切れさせる首相が出現するのかどうか、継続的に注視していく必要がある。[42]

他方、先行研究が存在しない小泉以前の首相に分析の範囲を広げることも、突破口を開く有力な手段となりえる。そうすることで、「ののちゃん」の首相描写はもちろんのこと、本論文の前編と中編で指摘した家庭的４コマ漫画の首相描写と社会的注目度に関する仮説についても、理論化にむけて有用な材料が得られるかもしれない。

注

34　小川雪「行こうののちゃんの町へ」『朝日新聞』2009年５月５日。

35　「ののちゃん5000回へ　一家の日常　風刺の隠し味」『朝日新聞』2011年８月９日、「朝のクスッと20年」『朝日新聞』2011年10月12日。いしいの病気療養のため、2009年11月21日号の作品（No.4882）を掲載後、「ののちゃん」は2010年２月いっぱいまで休載している。再開したのは同年３月１日号からである。

36　山口佐栄子「４コマ漫画」、夏目房之助・竹内オサム編・著『マンガ学入門』（ミネルヴァ書房、2009年）、

12。いしいの著作歴については、山野博史「いしいひさいち著書目録」『関西大学年史紀要』第15号（2004年３月）：１～52、いしいひさいちほか、新保信長・穴沢優子編『文藝別冊　［総特集］いしいひさいち　仁義なきお笑い』（河出書房新社、2012年）、が詳しい。

37　小泉・鳩山を描いた作品は、それぞれ、本論文前編の後注３で示した新庄・水野ほか「新聞４コマ漫画が描く小泉劇場（後編）」、水野・福田「新聞４コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相（後編 －２）」でおこなっている。

38　山口「４コマ漫画」、夏目・竹内編・著『マンガ学入門』13。

39　いしいひさいち「『しらんぷり』基本に」『朝日新聞』2005年９月20日、いしいひさいち「でっちあげインタビュー　いしいひさいちに聞く」、いしいほか、新保・穴沢編『文藝別冊　［総特集］いしいひさいち』22。

40 「漫画で読む名人戦」『朝日新聞』2012年５月29日。なお、前述したインタビュー形式の自筆エッセーでは、大震災をまったく取りあげなかった理由として、「そうした事態を描くにふさわしい漫画でないことと神戸の地震の反省がありました」と書いている。つづけて「神戸の地震の反省」について、「知人の安否を訪ねて［ママ］直後の神戸市内に入ったことで何本か描いてしまいましたが、そのお笑いが人の不幸をあざ笑いかねない［ものだった。］ナンセンス漫画家を自称するなら沈黙すべきでした」と説明している。（いしい「でっちあげインタビュー　いしいひさいちに聞く」、いしいほか、新保・穴沢編『文藝別冊　［総特集］いしいひさいち』24。）

41 「朝のクスッと20年　デッチあげインタビュー　第38回」『朝日新聞』2011年10月12日。

42　本論文執筆時点で、野田佳彦、および安倍晋三（第２次）を描いた作品は確認できていない。

【Abstract】

Prime Minister Naoto Kan in Newspaper Comic Strips（Part 3）: An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2010–2011

Takeya Mizuno

This research attempts to analyze qualitatively（and partly quantitatively）how comic strips of the three major national newspapers in Japan, *Mainichi, Yomiuri*, and *Asahi*, both in morning and in evening editions, portrayed Prime Minister Naoto Kan during his tenure, from June 8, 2010 to September 2, 2011.

As the third installment of a multiple-part series, this article（Part 3）analyzes qualitatively how *Asahi*'s "Nono Chan"（Little Nono）depicted Prime Minister Kan.

In the later installments which are planned to appear in the upcoming issues, comic strips of *Asahi*'s "Chikyu Boei Ke no Hitobito"（The Earth-Saver Family）will be analyzed qualitatively, and conclusions will be presented.